

第48章

モルモン1－6章

はじめに

モルモンは、主がニーファイ人を訪れられた話とその後200年間続いた平和の時代について簡単に述べた後、第201年から高慢と不和と悪事が広まり始めたことを報告している(4 ニーファイ1:24－47 参照)。モルモン書には、モルモンが目撃した数々の出来事しゅうえんが記されており、その中にはニーファイ人の文明の終焉が含まれている。モルモン1－6章において、わたしたちはモルモンが自分の民の滅亡に対して抱いた悲しみを共にすることができる。その滅亡は、民が主と主の福音を拒んだためにもたらされたのであった。わたしたちはまた、自分自身の人生においてそのような災いを避けようと決意することができる。

注解

モルモン1:1 「わたしモルモンは」

・預言者ジョセフ・スミス(1805－1844年)は次のように教えている。「モルモンという言葉は、文字どおりには、より良いという意味である。」(*History of the Church*, 第5巻, 400)

・モルモンの生涯について概略を紹介する中で、ゴードン・B・シンクレア大管長(1910－2008年)は、末日聖徒イエス・キリスト教会を指して用いられるようになっているモルモンという名前が持つ意味について次のように述べている。

「このモルモンという人の偉大さと善について思い起こしてほしいと思います。彼はキリスト降誕の4世紀後にこのアメリカ大陸に生きた人です。彼が10歳のとき、民の歴史を記録したアマロンは、モルモンのことを『まじめ……で、観察が鋭い』子であったと記しています(モルモン1:2)。アマロンはモルモンに、24歳になったら先祖についての記録を管理するようという責任を与えました。

モルモンの幼少期に続く時代は、彼の国にとって長年に及ぶ恐ろしい流血の時代となりました。それは、ニーファイ人と呼ばれる人々とレーマン人と呼ばれる人々との間の長くて恐ろしい戦争でした。

モルモンは後にニーファイ人の軍の指揮官になり、自分の民が虐殺されるのを見て、民が繰り返し打ち破られるのは、民が神を捨てたからであり、そのために神もまた民を捨てたのであると彼らに教えました。……

モルモンはわたしたちに、警告と願いを込めて、復活されたイエス・キリストについての証あかしを雄弁に宣言しました。自分の民と同じように、もしもわたしたちが主の道を捨てるならば災いが訪れることを警告しました。



敵が生き残った者を捜しに来ており、自分もあまり長くは生きられないことを知っていたモルモンは、わたしたちの世代に向かって、信仰と希望と慈愛をもって生きようと嘆願し、次のように言っています。『この慈愛はキリストの純粋な愛であって、とこしえに続く。そして、終わりの日にこの慈愛を持っていると認められる人は、幸いである。』(モロナイ7:47)

優れた指導者であったモルモンは、そのような善良さと強さ、力と信仰に満ちたすばらしい預言者だったのです。』(『聖徒の道』1991年1月号, 59 参照)

モルモン1:16 神に故意に背く

・十二使徒定員会のジェフリー・R・ホランド長老は、モルモンの霊的に成熟した状態とモルモンの民の罪深い状態を対比している。モルモンは義にかなった望みを抱いていたにもかかわらず、民の反抗的な状態のために教えを説くことを禁じられた。「成熟していったモルモンは、そのころには15歳になっていたが、周囲の罪深さとは懸け離れて、その絶望的な時代から超然としていた。その結果として、『主の訪れを受け、イエスの慈しみを味わって知〔り〕』[モルモン1:15]、自分の民に雄々しく教えを説こうとした。しかし、光を豊かに受けている人々がそれを拒むときに神が時折なさるように、モルモンは文字どおり口を閉ざされた。モルモンは神に故意に背いた国民に教えを説くことを禁じられたのだった。民は、身を変えられた3人のニーファイ人の弟子たちによって行われた奇跡や伝えられたメッセージを拒んだために、3人の弟子たちもまたその務めにおいて口を閉ざされ、自分たちが遣わされていた民のもとから連れ去られていた。」(*Christ and the New Covenant* [1997年], 318)

・ディーン・L・ラーセン長老は七十人の会員として働いていたとき、神に背くことは個人に原因があり、もし正さなければそれは広がっていき破滅的な結果を招くと説明している。

「歴史的に見て、主によって示された人生の航路から人が漂い離れていくのは、個人が主の標準について妥協し始めるときです。故意に背き、悔い改めがなされない場合は特にそうです。自分の時代に真実の道から離れていった人々についてのモルモンの記述を思い起こしてください。民は無知のままで罪を犯したわけではありませんでした。神に故意に背いたのです。全体的な流れとして起こったのではなく個々の教会員が承知のうえで主の標準について妥協し始めたときに始まったのです。彼らは、ほかの人も妥協していることを知って、自分が道をそれることを正当化しようとしてしました。故意に罪を犯す人はすぐに、もっと居心地良く感じられ、自分の不品行が正当化されるような自分なりの標準を設けようとします。また、この自己欺瞞の航路を喜んで一緒に漂ってくれる人々とつきあおうとします。

漂う人の数が増えるにつれ、彼らの影響力はますます強くなっていきます。それは『大きく広々とした建物症候群』と呼べるかもしれません。その追従者たちが主の道に従う者に対して公然と仲間意識を持ち、彼らと行動を共にするとき、漂流はさらに危険なものとなります。かつてははっきりしていた価値観と標準がぼやけ、不安定なものとなります。真の原則がぼやけていくにつれて、行動の基準はそれを反映し始めます。かつては嫌悪感や恐れを抱いていた行為が、今や幾分ありふれたものとなるのです。」（“Likening the Scriptures unto Us,” モンテ・S・ナイマン, チャールズ・D・テート・ジュニア編, *Alma, the Testimony of the Word* [1992年], 8）

モルモン1:19 魔術, 魔法, 呪術^{じゅじゅつ}

・大管長会のジェームズ・E・ファウスト管長（1920 - 2007年）は、サタンの秘密の行いに興味を抱かないように警告している。「サタンやその不可解な教えに好奇の目を向けるのは良いことではありません。悪魔に近づいても、決して良いものは得られません。悪魔に近づくと火遊びをするのと同じで、すぐにやけどを負ってしまうことになります。……ただ一つの安全な道は、サタンとサタンの邪悪な行いやふらちな習慣から遠ざかることです。悪魔崇拝、魔術、魔法、^{よう}妖術、呪術、黒魔術、またいかなる邪神崇拝にも決して手を染めてはなりません。」（『聖徒の道』1988年1月号, 36 参照）

モルモン2:13 「罰の定めを受ける者の悲しみ」

・十二使徒定員会のニール・A・マックスウェル長老（1926 - 2004年）は、神の御心に添った悲しみと「罰の定めを受ける者の悲しみ」の違いについて次のように述べている。「罪を認めると、ほんとうの悔恨の情が心を覆います。これは、もう『罪のあるままで幸福になる』ことができないとき

の単なる『この世の悲しみ』や『罰の定めを受ける者の悲しみ』ではなく、『神のみこころに添った悲しみ』です（2コリント7:10; モルモン2:13）。それに対し、偽りの悔恨の情は、自分の弱点を哀れむようなものです。ただ形式的に後悔するだけでは、間違いを嘆くことはあってもそれを改めるところまではいきません。」（『聖徒の道』1992年1月号, 34 参照）

悔い改めと清めに導く悲しみをわたしたちが理解できるように、エズラ・タフト・ベンソン大管長（1899 - 1994年）は、罪の定めを受ける者の悲しみと対比して、神の御心に添った悲しみの性質について次のように説明している。「神の御心に添った悲しみは、^{み た ま}御霊の賜物の一つです。それは自分の行いが神に対する背罪であることを深く認識することです。また救い主が最も偉大な御方で、罪とは一切無縁であったにもかかわらず、わたしたちの行いのゆえに苦しみを受けられたということをはっきりと自覚することでもあります。主はわたしたちの罪のゆえにあらゆる毛穴から血を流されたのです。霊的に、また精神的にこのような苦しみを味わうことについて、聖文には『打ち砕かれた心と悔いる霊』という表現が用いられています。このような感情こそが、真の悔い改めへの必要条件なのです（教義と聖約20:37）。」（*The Teachings of Ezra Taft Benson* [1988年], 72）

モルモン2:15 「猶予の日が……過ぎ去ってしまった」

・ジェフリー・R・ホランド長老は、モルモンの記録にある、民を救うための時間が尽きてしまったという身も凍るような一節について次のように述べている。「ニーファイ人の歴史において、その始まりからわずか950年足らず、神の御子御自身の訪れを受けてからわずか300年あまりのこの時に、モルモンは物語が終わりを迎えたことを悟った。彼が書き記した中で恐らく最も恐ろしいと思われる一節で、モルモンは簡潔に次のように断言している。『わたしは、彼らのための猶予の日が、この世的にも霊的にも過ぎ去ってしまったことを知った……。』彼の民は、あらゆる教訓の中で最も重大な、運命を決する教訓を学んだのであった。すなわち、神の御霊はいつでも人を励ますわけではなく、個人的にも全体としても、時間が尽きてしまうことがあり得るということである。悔い改めの日は過ぎ去ってしまう可能性があり、ニーファイ人の悔い改めの日も過ぎ去ってしまった。民は『自分たちの神に公然と背いた状態で切り倒され』ていき、道徳的な注釈としては生々し過ぎるほどの^{ひ ゆ}比喩で『^{ふん}墓のように地の面に積み上げられている』と記されている。」（*Christ and the New Covenant*, 319）



● スペンサー・W・キンボール大管長（1895 - 1985 年）は、今日のわたしたちも、どのようにして人を清める悔い改めの恵みを遠ざけてしまう恐れがあるかについて、次のように述べている。「大いなる悔い改めの原則がいつでも運用できることは事実であるが、邪悪で不従順な人に対しては、重大な適用の制限がある。例えば、罪はひどい習慣性を持つため、時には人を取り返しのつかない地点まで追いやってしまうことがある。……戒めに背く者は罪の深みにはまり込むにつれて、ますます過ちに浸り、立ち直ろうとする意志は弱くなり、ついにはほとんど望みのない有様となつてずるずると横滑りを続け、結局向上しようとする気持ち（^{ありさま}）を失ってしまうか、あるいはそうする力をなくしてしまう。」（『救しの奇跡』117）

モルモン 2 : 19

民の悪事に対する悲しみのただ中にあった
モルモンに希望を与えていたものについて、
この節からどのようなことが学べるか。

モルモン 2 : 26 「自分の力に頼るしかなかった」

● わたしたちは、忠実に生活しようとするときに天の御父がどれほど日々の生活の中で助けてくださっているかを認めず、感謝しないことがある。モルモンは、民は邪悪になったときにそれまで彼らを守っていた主の力を失ったと記している。七十人定員会の会員として働いていたとき、レイ・H・ウッド長老は次のように説明している。「だれかが神の戒めのいずれかを破ったとき、もし悔い改めが見られなければ、主は守りとなり支えとなる力を取り去られるのです。わたしたちが神から来る力を失うとき、問題があるのは神ではなく

わたしたちの方であることを、わたしたちは確かに知っています。『あなたがたがわたしの言うことを行うとき、主なるわたしはそれに対して義務を負う。しかし、あなたがたがわたしの言うことを行わないとき、あなたがたは何の約束も受けない。』（教義と聖約 82 : 10）わたしたちの悪い行いは落胆をもたらします。それはキリストが示してくださっている『完全な希望の輝き』をかすませ、消してしまいます。神の助けがないとき、わたしたちは自分の力に頼るしかないのです（2 ニーファイ 31 : 20）。」（『リアホナ』1999 年 7 月号, 48）

モルモン 3 : 8 - 11 モルモンは司令官となることを断った

● 約 35 年にわたって民を導いてきたにもかかわらず、この時点でモルモンは指揮を執ることを断った。モルモンは自分が短くまとめていたモルモン書の影響を受けていたに違いない。モルモンは、司令官モロナイやヒラマンが戦争に行った際には自分たちの土地と家、妻子、権利、特権、自由を守り、礼拝できる状態を保つという正当な理由があったことを知った（アルマ 43 : 9 - 58 : 12 参照）。そしてモルモンはそのような戦争の目的を民に教えた（モルモン 2 : 23 - 24 参照）。しかし自分の時代のニーファイ人が「報復をする」という動機でレーマン人と戦い、また「自分たちの力を誇るようにな〔り〕」、大きな「悪事と忌まわしい行い」により罪を犯すのを見て、モルモンは一時的に軍隊の指揮を執ることを断ったのであった（モルモン 3 : 9 - 14）。

モルモン 3 : 9 ; 4 : 8 誇る

● ニール・A・マックスウェル長老は、自分自身の力ではなく天の御父の力を認めるように警告している。「義にかなった働きの刈り取りを楽しむ前に、まずは神の手を認めようではありませんか。そうでないと次のような合理化が頭をもたげます。『自分の力と自分の手の働きで、わたしはこの富を得た……。』（申命 8 : 17）また、（ギデオンの思慮深い小さな軍隊を除く）古代イスラエルの民が『わたしは自身の手で自分を救ったのだ』と大言壮語したように、自ら『誇〔って〕』しまうのです（士師 7 : 2）。自分自身の『手』を自慢すると、すべてのことの中に神の御手（^み）を認めることが 2 倍難しくなります（アルマ 14 : 11 ; 教義と聖約 59 : 21 参照）。」（『リアホナ』2002 年 7 月号, 41）

モルモン 3 : 12 「わたしの内にある神の愛によって」

● グレン・L・ペイスビショップは、管理ビショップリックの一員であったとき、モルモンが示した愛を努めて見習うように勧告している。「この預言者は堕落した人々に対してキリストのような愛を持っていました。わたしたちは、それ以下の愛に満足してよいものでしょうか。わたしたちもキリストの

純粋な愛をもって前進し、福音の喜びを多くの人々に伝えていかなければなりません。また、善と悪、光と闇、真理と誤りの戦いに加わりながらも、戦いに敗れて傷ついた人々の傷口を癒す務めを怠ってはなりません。宿命論に浸る余裕などないのです。」(『聖徒の道』1991年1月号, 9)

モルモン3:18-22 わたしたちの裁き

●十二使徒定員会のブルース・R・マッコンキー長老(1915-1985年)は、わたしたちの裁きにはほかの人々が携わるだろうと説明している。「実際には、キリストの下で義人を裁くあらゆる階層の判士がいるでしょう。悪人に対しては主がお独りで罰の定めを下されます。」(The Millennial Messiah [1982年], 520)

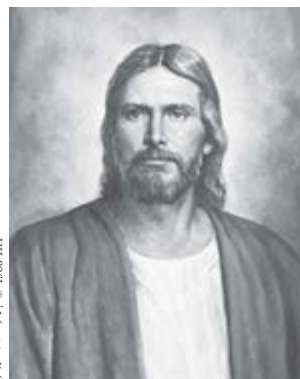
聖文では、裁きの日に役割を担うことになるものが少なくとも5つあると教えられている。

1. 自分自身(アルマ41:7; History of the Church, 第6巻, 314 参照)
2. ビショップ(教義と聖約41:9; 58:14, 17-20; 64:40; 72:17 参照)
3. 聖文(黙示20:12; 2ニーファイ25:18; 29:11; 33:14; 3ニーファイ27:25-26 参照)
4. 使徒(マタイ19:27-30; 1ニーファイ12:9; 3ニーファイ27:27; モルモン3:18; 教義と聖約29:12 参照)
5. イエス・キリスト(ヨハネ5:22; 3ニーファイ27:14 参照)

●ジョン・テラー大管長(1808-1887年)は、わたしたちの裁きにおける使徒の役割についてさらに詳しく説明している。「キリストが長であられます。……もしエルサレムの十二使徒定員会が十二部族の判士になり、この大陸の十二弟子がニーファイの子孫の判士になるのであれば、ヤレドの兄弟とヤレドが彼らの子孫であるヤレド人の判士になり、さらに、わたしたちの時代に職務を行ってきた大管長会と十二使徒がこの神権時代における人類に関して働くのはまったく道理に合っているように思われます。」(The Gospel Kingdom, G・ホーマー・ダラム選 [1987年], 138)

モルモン3:20-22; 5:12-14 キリストを信じるようにという勧告

●ゴードン・B・ヒンクレー大管長は、モルモン書はキリストに対するもう一つの証であると証している。「この新世界の聖典は、わたしたちの前に、主イエス・キリストの神性と実在とを証する第二の書物として存在しています。同時に、キリストの贖罪の恩恵があまねく全人類に及んでいることと、主



デール・バーンソン © 1983 IRI

が墓の暗闇の中からよみがえられたことを証しています。この書物を最初から最後まで読めば、全能の神の御子として一人のおとめからお生まれになるはずの主について、確かな預言の言葉が数多く見つかるはずで、肉体を持つ一人の人間として、人々の間で行われる御業についての預言があります。世の罪を贖う

ために罪なくして犠牲となられる神の小羊の死について、はっきりと書かれています。また、復活されたキリストが西半球に住む民のもとを訪れられた、感動的で靈感あふれる真の記録もこの中に残されています。その証の書が、今だれでも手に取ることができるようになっています。だれでも読むことができ、だれでもその内容について深く考えることができます。祈る者には皆、この書物が真実の書であることを聖霊の力によって知るであろうという約束が与えられているのです(モロナイ10:3-5 参照)。(『聖徒の道』1994年7月号, 76-77)

モルモン4:23 様々な版の移動についての概説

●アマロンはモルモンに、シムの丘からニーファイの大版を取り出してそれに書き加えるように言った。モルモンは、残りの版(真鍮の版、ニーファイの小版、およびエテルの版)はシムの丘にそのままにしておくことになっていた(モルモン1:2-4 参照)。モルモンは大版を取り出し、それに自分の民の行いを残らず書き記し、その中から選んだ部分を用いて自分の民の歴史を短くまとめた自分自身の記録を作った(モルモン2:18 参照)。後にモルモンはシムの丘に戻り、すべての版(真鍮の版、ニーファイの小版、エテルの版、およびそのほかのすべての版)を丘から取り出した(モルモン4:23 参照)。レーマン人が記録を損なうことを恐れて、モルモンは自分が短くまとめた記録とニーファイの小版(金版)を除いて、もろもろの版を再びクモラの丘に隠した(モルモン6:6 参照)。そしてこれらの金版については、息子のモロナイに渡した(モルモン6:6; モルモンの言葉1:1-7 参照)。

モルモン5:12-14

モルモンは自分が記録を残すおもな目的は何であると
考えていたか(モルモン3:20-21も参照)。

モルモン 5:16 ^{みたま}御霊は「これらの者たちの先祖を励ますのをやめてしまった」

• ハロルド・B・リー大管長（1899 - 1973 年）は、モルモンの時代の邪悪な民は聖霊だけでなく、キリストの御霊も生活から失ってしまったと説明している。「モルモンは、主の御霊が離れてしまった民、すなわち自分の民について述べています。そのことについて読むとき、……わたしには次のことが明らかであるように思われます。すなわち、モルモンが話していたのは、聖霊の賜物を持つことができない、つまり聖霊を伴侶とすることができないことについてだけではありませんでした。この世に生まれるすべての人が受ける権利を持ち、自分自身の罪によって失わないかぎり人を励ますことを決してやめない、真理の光について話していたのです。」（Conference Report, 1956 年 4 月, 108）



モルモン 5:17 「かつて喜ばしい民であって」

• モルモンは、かつては「喜ばしい」状態であった自分の民が、転じて腐敗した状況に陥ったことを嘆いた。ゴードン・B・ヒンクレイ大管長は、喜ばしい状態に伴う幾つかの祝福と、そのような状態に至るための条件について考え、次のように述べている。「知恵と知識の祝福、すなわち隠された知識の宝というすばらしい祝福もあります。もし、この律法に従順に歩むなら、わたしたちの地は『楽しい地』になると約束されています。『地』という言葉は『民』と置き換えることもできます。従順に歩む人々は喜ばしい民となることができます。ほかの人々から祝福された民と唱えられるようになるとありますが、そのような喜ばしい民となるのは何とすばらしいことではないのでしょうか。」（『聖徒の道』1982 年 7 月号, 74 参照）

モルモン 5:23 「神の手の内に」

• モルモンは末日のわたしたちに向けて、神と神の力を認めるように勧告を書き残している。わたしたちは神の御手の内にある。七十人の W・クレグ・ズウィック長老は、神の御手の内にあることが示す幾つかの象徴的な意味と祝福について、次のように説明している。

「手は物事を象徴的に表現する力に富んでいます。ヘブライ語で『手』を表す一般的な言葉の『ヤド (yad)』は、力、強さ、勢力などを表す言葉として比喩的に使われることもあります（ウィリアム・ウィルソン, *Old Testament Word*

Studies [1978 年], 205 参照)。このように、手は力と強さを表します。……

神の御手の内にあるということは、単に注意深く見守られているというだけでなく、神の驚くべき力によって守られ、保護されていることも意味します。

聖文の至る所に、主の御手という言葉が出てきます。主の助けが繰り返し与えられてきた証拠です。世界を創造された主の力強い御手は、幼子を祝福するほど優しいものでもあります。……

わたしたちは皆、主の強さにすれば耐えられることを知る必要があります。主の御手に自らをゆだねれば、主がわたしたちを支え、独りでは到達不可能な高みへと導いてくださるのを感じるのです。……

……どうしたら自分の手を伸ばして、主が与えてくださる慰めを受けることができるのでしょうか。……

ここに 4 つの鍵があります。

学ぶ。

聴く。

^{みたま}御霊を求める。

常に祈る。

進んで扉を開き、助けを与えてくださる御手を受け入れるならば、主はわたしたちを養い、支えてくださいます。……

主の御手の傷を想像してみてください。主の節くれ立った御手、^{あがな}贖いの犠牲によって裂かれたその御手が、わたしたちの手にさらに大きな力と方向性を与えてくださるのです。

苦難の時に導いてくださるのは、この傷を負われたキリストです。行き詰まったり、導きや、歩み続ける勇気が必要だったりするときに、主が支えてくださるのです。

神の戒めを守り、主の御手を取って、ともに主の道を歩むならば、信仰をもって進み、二度と孤独を味わうことはありません。」（『リアホナ』2003 年 11 月号, 34 - 36 参照）

モルモン 6:16 - 20

これらの節からモルモンについてどのようなことが分かるか。どうすればこれらの特質の幾つかを自分自身の生活に取り入れることができるか。

モルモン6:16-22 両腕を広げておられるキリストを拒んではならない

• モルモンは悔い改めなかった自分の民の死を嘆き、彼らが人生を終える前にその生き方を変えなかったことを悲しんだ。もし民が高慢を捨て去り、罪を悔い改めていたならば、救い主との再会は喜びに満ちたものとなっていただろうとモルモンは教えている（モルモン6:17 参照）。

わたしたちもまた裁きの時に主の前に立つために自分自身を備えなければならない。ジェームズ・E・ファウスト管長は次のように説明している。

「わたしたちは贖罪がもたらす最終的な祝福を強く望んで



ハリー・アーランド・ジョンソン、© IRI

います。それは、救い主の一つとなり、救い主の御前に行くことです。また、わたしたちが、救い主からにこやかにほほえんで温かく迎えられ、それぞれの名前が呼ばれ、両手を広げて招き寄せられ、限らない愛をもってその御腕に抱かれることも心から願っています。もしわたしたちが救い主の御前にふさわしいと感

じることができるなら、それは何と栄光に満ちた感動的な経験となることでしょう。救い主の大いなる贖いの犠牲によりわたしたち一人一人に与えられる無償の賜物とは、昇栄するための唯一の道です。その道によってのみ、わたしたちは救い主の御前に立ち、顔と顔を合わせることができるので

す。贖罪の大いなるメッセージは、救い主がわたしたちすべてに抱いておられる完全な愛です。この愛は、あふれるばかりの憐れみ、忍耐、恵み、公平、長く堪え忍ぶことに満ちた愛、そしてとりわけ、赦しに満ちた愛なのです。

サタンが悪の影響力が、間違いを克服しようとするわたしたちのあらゆる望みを打ち砕こうとするでしょう。サタンは、わたしたちは道に迷っていて望みはないと思わせることでしよう。しかし、それとは対照的に、イエスはわたしたちを引き上げるために手を差し伸べてくださいます。わたしたちは、悔い改めと贖罪の賜物により、救い主の御前にふさわしい状態で立てるように備えることができるのです。」（『リアホナ』2002年1月号、22）

理解を深めるために

- 「まじめな心の持ち主」（モルモン1:15）とはどのような意味だろうか。
- どうすれば自分の生活で受けている主の影響に気づくことができるだろうか（モルモン3:3 参照）。
- 「神の手の内に」あるとはどういう意味だろうか（モルモン5:23）。神の手の内にあることでもたらされる恵みを、さらに豊かに享受するにふさわしくなるために、どのようなことができるだろうか。

割り当ての提案

- モルモン3:17-22を1節ごとに分析し、書き留める。次に、これらの節に含まれている重要な点を友人か家族の一人に説明する。